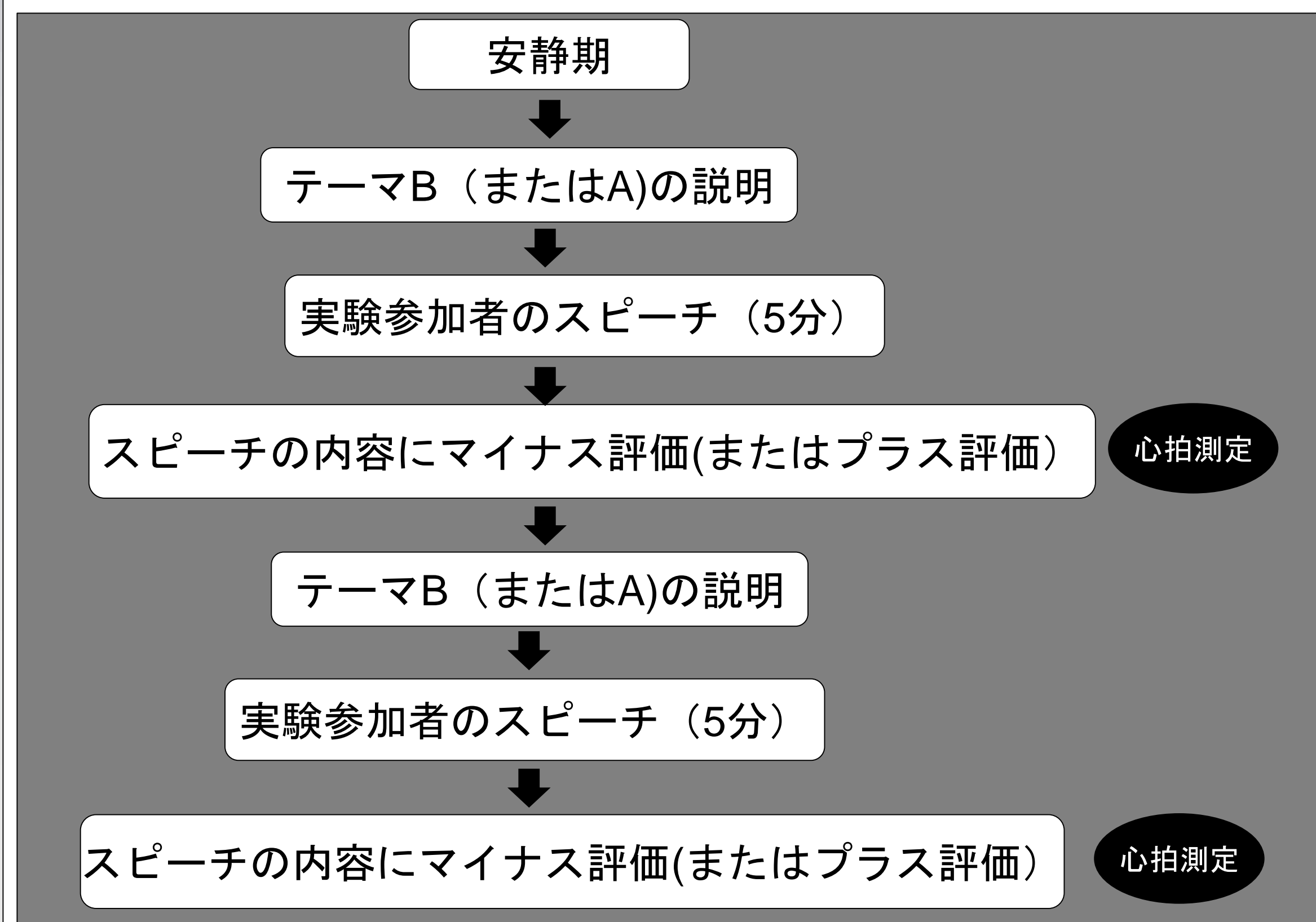


スピーチ後の肯定的・否定的評価が心拍率におよぼす効果

○中山 誠
(関西国際大学)

はじめに

人前でのスピーチは、ストレスとなることが多くの研究で確かめられているが(國廣ら, 2013, Saslowら2013)、本研究では、スピーチ中ではなく、スピーチ後の他者からのプラスもしくはマイナスの評価が心拍率におよぼす影響を検討した。



テーマA: 我が国で、アルバイトを実施している大学生の比率や、1週間あたりの実施日数、実施時間を示した上で、「学生は自立した生活をする上で、アルバイトの時間を今よりももう少し増やしてもいいのではないかと」

実験参加者の反対意見へのマイナス評価の例: 「親からの経済的援助を減らし、自立する上でアルバイトは重要。自らお金を稼ぐことができる。また、アルバイトは学生にとって実社会に触れる貴重な体験、就職活動でも学生時代の成功体験としてのエピソードになるので、アルバイトは現在よりも増やしてもいいのではないかと」

テーマB: 現在の我が国の出生率は2005年に最低の1.26まで低下、その後やや回復はしたものの、少子化に歯止めはかかっていないという記事などを示した上で「女性は出産後、仕事をやめて育児に専念すべきである。」

実験参加者の賛成意見へのマイナス評価の例: 「出生率の低下の問題は女性が仕事をやめて育児に専念するかどうかには依存するわけではなく、社会的な環境や、家族の協力によるところが大きい。したがって、出産後も女性は仕事を辞めるべきではないのではないかと」

方法

実験参加者: 健康な大学生17名(男性10名, 女性7名, 年齢は19-21歳, 平均19.8歳) 実験者と、面識のある実験参加者は9名, ほとんど面識のないものが8名)

測定と記録: ニホンサンテック製Polyam4

安静期, 各評価ピリオド後, 一般感情尺度(小川ら, 2000)による評価。実験終了後には実験内容のディブリーフィング。

結果

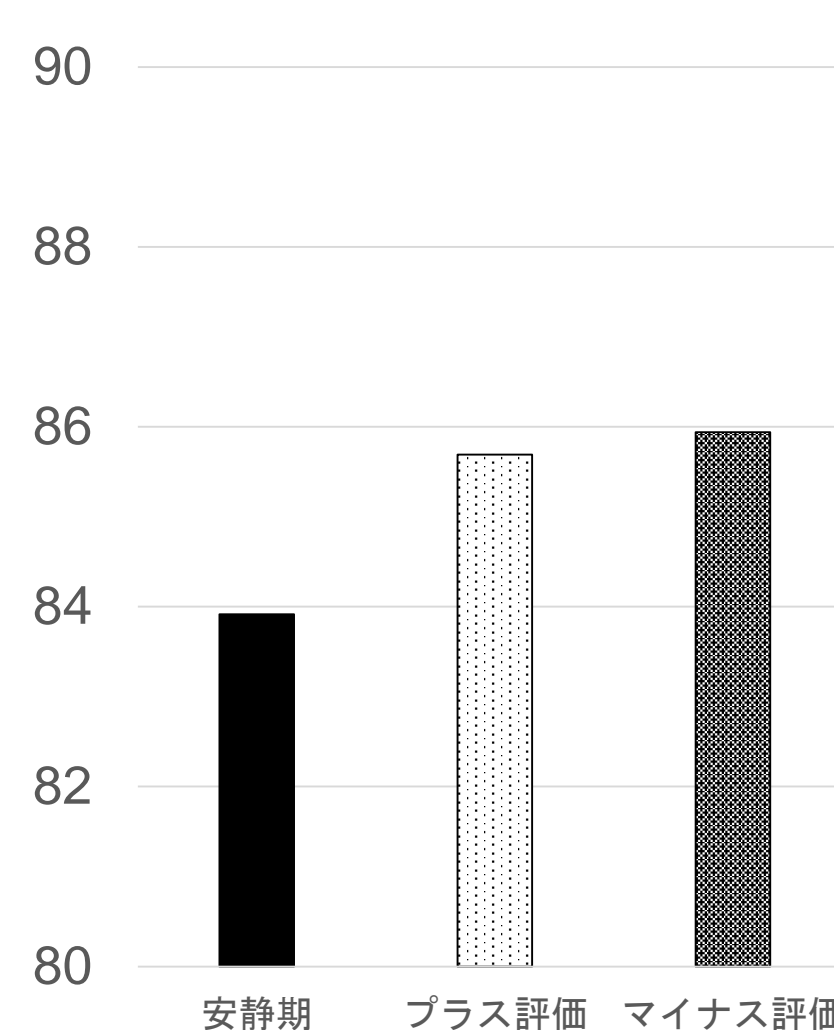


Fig.1 心拍率変化

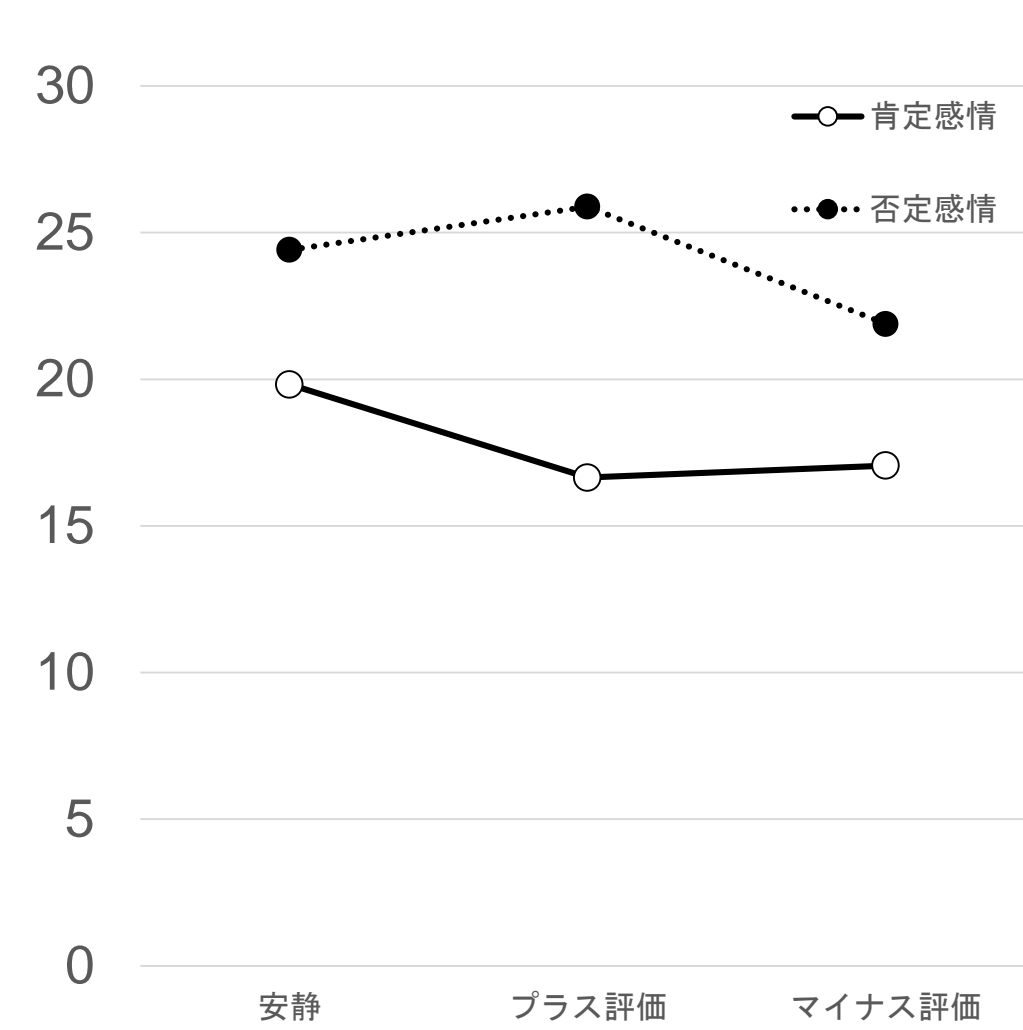


Fig.2 一般感情尺度の結果

Fig.1に、安静期, プラス評価ピリオド, マイナス評価ピリオドの最後の3分間の心拍率を示した。安静期に比べて、評価を受けている期間の心拍率は幾分、高い値を示したものの、一元配置の分散分析で主効果は有意ではなかった ($F < 1$)。したがって、意見を述べた後の、プラスもしくはマイナス評価は心拍率に影響していないといえよう。

また、Fig.2に示した一般感情尺度の結果から、本実験におけるプラスあるいはマイナスの評価は、実験参加者の肯定的感情、もしくは否定的感情の変化にほとんど影響していないことが判明した。

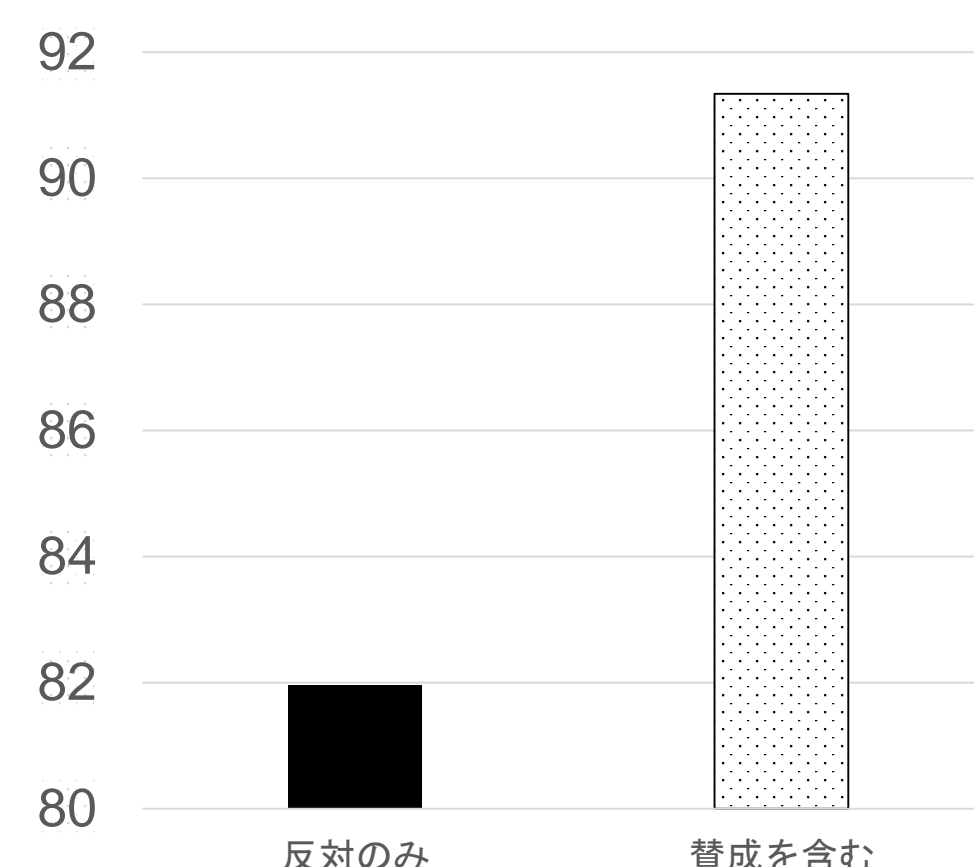


Fig.3 賛成意見と反対意見後の心拍率変化

次に、Fig.3には、テーマA,Bの両方もしくは一方に、賛成の意向を示した7名と、テーマA,Bの両方に反対意見を述べた10名の平均心拍率を示した。一元配置の分散分析の分散分析を行ったところ、主効果が有意であった ($F(1/15) = 6.54$ $p < .05$)。

テーマA: 「学生はアルバイトを増やしてもいいのではないかと」
→ 学生の本分は勉強であるというのが建前
テーマB: 「女性は出産後、育児に専念すべきである」
→ 男女雇用機会均等法の施行以来の考えに沿わない
∴ ともに、賛成意見を述べにくい命題である
反対意見を述べた方が社会的に容認されやすいテーマ?

スピーチ後のプラス・マイナス評価は心拍率の影響しない(評価の仕方がもっと極端でないと心拍が変化しない?)
社会的に容認されやすい意見を述べた場合は、自己の主張に対する自信の度合いが大きいために、心拍率の上昇が抑えられたのではないかと?